



琉球大学

University of the Ryukyus

Title	複合接続詞の分類と副詞節の性格
Author(s)	副島, 健作
Citation	言語文化研究紀要 : Scipsimus(14): 87-109
Issue Date	2005-10
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/2684
Rights	

琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository



琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository



複合接続詞の分類と副詞節の性格

副島 健作

0. 序

本稿では、現代日本語の、以下の例に示すような、出来事を従属的に挙げ、主文述語との関係を示す働きをするとされる従位接続詞 (subordinators) の体系と意味を分析する。とりわけ、形式化した語や助詞などが複合しあい、全体が1つの付属語として機能し、副詞節を形成する、いわゆる「複合接続詞 (compound conjunctions)」の体系と意味を中心に分析する。(以下、下線を付して示す。)

- (1) 花がぱつと咲くように、葉をまいておいた。
- (2) 彼が手伝ってくれたおかげで、仕事が完成した。
- (3) 彼女はロシア語ができるにもかかわらず、ロシア人と話そうとしない。
- (4) 空で何かピカッと光ったかとおもうと、ドーンという大きな音がした。

これらはそれぞれ目的、原因、逆接、時間的同时性を表しており、意味は異なるが、主節を従属する節を作るという点で同一の機能を持っている。

ところが、その接続の仕方は微妙に異なる。「ように」と「にもかかわらず」は動詞のスル形 (およびシナイ形)、「おかげで」と「かとおもうと」は動詞のシタ形 (およびシナカッタ形) に接続しているが、「おかげで」と「にもかかわらず」はそれぞれスル形、シタ形とも共起することができる。一方、(1)と(4)は同様の交代ができない。

- (5) *花がぱつと咲いたように、葉をまいておいた。
- (6) 彼が手伝ってくれるおかげで、仕事もはかどる。
- (7) 彼女はロシア語ができたにもかかわらず、ロシア転勤を断った。
- (8) *空で何かピカッと光るかとおもうと、ドーンと大きな音がした。

このように、同一機能を持っている従位接続詞でも、文法的なふるまいには諸相あるということがわかる。

本稿の目的は、従位接続詞を形態論的特徴に着目して分類しなおし、接続形と接続助詞との関係についてより十分な答えを与えるとともに、例 (1) - (4) に見られるような複合接続詞が日本語の中でどのような位置にあるか考えていくために、日本語の副詞節の体系と意味を的確に記述することにある。

1. 前提的議論

日本語の文や節の研究においては、従来、述語の数や節と節との構造という観点から重文 (compound sentences) と複文 (complex sentences) という概念が用いられている。重文というのは対等に並ぶ節でできている文「花は咲き、鳥は歌う」、複文というのは文のある部分が従属節 (subordinate clauses) でできている文「太郎は部屋に入ると、明かりをつけた」である。

複文の従属節のあり方には主文にたいする機能という観点から次の3種類あるとされる。名詞節 (noun clauses)、形容詞節 (adjective clauses)、副詞節 (adverbial clauses) というものである¹。名詞節とは「私が登ったのは富士山です」のように、文において主語や目的語の位置を占める節であり、形容詞節とは「私が登った道はでこぼこで歩きにくかった」のように、名詞を限定する働きをもつ節であり、副詞節とは「私が富士山に登れたら、1万円ちょうだい。」のように、主文述語を修飾する節である。本稿では、このうち、副詞節に焦点を絞って、論述していく。

ところで、ここで問題にしているのは主文に対する機能である。用語の使い方としては、形容詞節の機能は「名詞すなわち体言を飾ること」であるので、連体修飾節と言い換えてもいい。また同様に、副詞節の機能は「述語すなわち用言を飾ること」であるので、連用修飾節と言い換えることができる。機能による分類はどんな品詞に似ているかではなく、どんな文の成分としてあるかが問題にされるべきであるので、本来なら後者の呼び方のほうがよりふさわしいと言える。しかし、世界の諸言語の記述に adverbial clause という用語が使われ (Thompson and Longacre (1985) など)、本稿で論じる副詞節の意味や用法は他の言語のそれと共通点がある、という認識に立っている。したがって、さしあたって本稿では adverbial clauses すなわち「副詞節」という用語を用

いることにする。

2. 先行研究

2. 1. 南 (1974)

複文の分類の研究は国立国語研究所 (1951) や三上 (1953) をはじめ少ないが、中でも最も知られているのは、日本語の従属節をどのような要素を内部に含むことができるか、ということを基準に4つに分類した南 (1974) であろう。ガ格以外の格成分やヴォイスやそれに関連する副詞成分のみが含まれるA類、A類に含まれる要素に加えて、ガ格、アスペクト、肯否、丁寧さ、テンスやそれに関連する副詞成分が含まれるB類、A類、B類に含まれる要素に加えて、主題、対事的モダリティとそれに関連する副詞成分が含まれるC類、すべての要素が含まれるD類である。以下(9)のように分類される。

なお、本稿の記述では文を受ける接続助詞を「～ので」「～から」のように表記し、動詞の語形変化+接辞による接続の形をシテ、シナガラのように表記することをあらかじめ断っておく。

(9) A類：シナガラ (継続), シツツ, シテ (状態副詞的), シシ (←連用形 反復), 形容詞と形容動詞 (ナ形容詞) の連用形

B類：シテ/シ (原因・理由), スルト, シナガラ (逆接), スレバ, シタラ, シテモ, シテ/シ (繼起的), セズ (セズニ), シナイデ, ～ので, ～のに, ～なら

C類：シテ/シ (前置きの), ～が, ～から, ～けれど, ～し

D類：直接引用節

さらに南 (1974) は、これらの節が共起する場合、それと同じ類の節かそれ以前の節しか含むことができないという制約があることも指摘した。すなわち、A類にはA類しか含まれず、B類にはA類とB類が含まれるが、C類は含まれない。この分類により、日本語の従属節の構造が、より副詞的性質の濃いA類からより文としての性質の度合いが高いD類に至るまで、段階的、階層的になっていることが明らかになった。つまり、A類のゼロからD類に進むに従って節の「文らしさ」が高くなる。南 (1974) を修正した田窪 (1987) ではその階層

性が以下のように明示されている。

- (10) A類 1 = 様態・頻度の副詞 + 動詞
- A類 2 = 頻度の副詞 + 対象主格 + 動詞 (+ 否定)
- B類 = 制限的修飾句 + 動作主格 + A + (否定) + 時制
- C類 = 非制限的修飾句 + 主題 + B + モーダル
- D類 = 呼び掛け + C + 終助詞

しかし、これらの分類では1つの形式が必ずしもいつも同じグループへ分類されるとは限らない。シテ、シ、シナガラやシツツなどは複数の類へまたがっている。この分類が従属節の構造の分類であって、接続形や接続助詞の形態の分類ではないからである。したがって、接続形や接続助詞の文法的なふるまいについては、この記述によってはとらえられない。

以下の例はどうだろうか。

- (11) *明日は雨が降るだろうので、かさを忘れず持っていこう。
- (12) 明日は雨が降るかもしれないのに、ピクニックに行くと言い張った。
- (13) 明日雨が降るはずなら、今頃雲が夜空を覆っているだろう。
- (14) 明日は雨が降るにちがいないので、ピクニックは中止にしよう。
- (15) 彼は会議に出席できるようだったのに、なぜかすっぱかした。
- (16) 彼が会議に出席できるらしかったなら、誘ってみるべきだった。
- (17) 彼は会議に出席できるそうだったので、代わりにお願いした。
- (18) 彼は会議に出席できそうなのに、病気を装って欠席している。
- (19) 彼は会議に出席しなければならないなら、這ってでも行くつもりだ。

先行研究では、「～ので」、「～のに」、「～なら」は対事的モダリティ（モーダル）と共起できないことからB類とされている。しかし、上記の例のうち、(11)を除く例では必ずしも共起不可能とは考えにくく²、先行研究の記述とは合わないものとなっている。

2. 2. 寺村 (1982)

それに比べると、寺村 (1982) の分類は活用形の体系的な整理の重要性の指摘があることから、より文法的ふるまいに着目したものと見える。そこでは、

単文と複文が連続するとしながら、以下のように分類される。単文と複文とは主体（および補語）が同一か否かで分類される。「文らしさ」は単文2型から複文4型へと高まっていくことになる。

(20) 単文 1型：「地球は太陽の回りを公転している」

2型：「おじいさんが山へ行って、柴を刈った。」

複文 1型：シ、シテ形が、主たる文の述語と別の補語をもっている場合、並立節を含む文。「おじいさんは山へ行き、おばあさんは川へ行く」

2型：あとに続く活用形、スレバ、シタラ、で終わる節を含むもの。および、スル形、イ形に条件のトが結びついた節を含む文。

3型：連体節を含む文。「冬の夜空に見えた星は…」

4型：接続節を含む文。「地球は太陽の回りを公転しているので、冬の…」

5型：引用節を含む文。

南 (1974) の分類でのA型が単文2型、B型が複文2型、C型が複文4型、D型が複文5型にほぼ対応する。異種主体のシ形、シテ形は意味・用法が広いため、他の複文とは区別して複文1型としている。この分類によると、南 (1974) でB型とされていた「～ので」、「～のに」、「～なら」も接続助詞であるので、接続節すなわち複文4型として分類され、上記の(11) - (19)の例が示す事実を矛盾なく受け入れることができる。

2. 3. 本研究の枠組み

城田 (1998) は従属節を形成する接続形や接続助詞にたいして「関連」という文法カテゴリーを提案し、その体系を形態論的観点から提示した。「関連」の体系は動詞の変化形と接続助詞とに分類され、変化形はさらに動詞そのものの変化と、シ形+接辞によって形成されるものとに分類される。形に特化した分類ではあるものの、それゆえ形と意味とが密接な関係にあるということが示唆されている。そこでは、変化形は述語の表す内容が主文述語をどう修飾する

か、を表すが、接続助詞は述語そのものではなく、文全体にかかって、文の表す内容が主文述語とどういう関係にあるか、を表すとされる。これを城田は「文尾助辞」による「文の活用」と呼んでいる³。変化形による副詞節は寺村の複文2型、接続助詞による副詞節は複文4型に対応する。

以上の先行研究の成果をふまえると、B類とC類はテンスの対立があるかないか、A類とB類は異種主体が可能かどうか、のテストで分類できるといえる。いずれも後者が可能な類である。以下に表1にして示す。

表1. 副詞節の分類

		城田 (1998) の分類			接続助詞
		語形 (接続形)			
		語尾形 (語形変化)		二次語幹形 (語形変化+接辞)	
		シ, シテ	シ,シテ以外の語形変化		
南 1 9 7 4 の 分 類	A類	シテ(様態)		シナガラ/シツツ(同時動作), シシ(←連用形反復), シツイデニ, シカタガタ, シガテラ, シガケニ, シシナニ, シザマニ	
	B類	シテ / シ (理由, 時間), シナイデ / セズ	スレバ, シタラ, シテモ, シタリ, シタツテ	シシダイ, スルト	
	C類	シテ / シ (並立)			～ので, ～のに, ～なら, ～が, ～けれど, ～し, ～から (理由)
	D類				～と(引用), ～という

異種主体のシ、シテは寺村(1982)にならって例外的な複文とすると、シ、シテ形以外の活用形はB類に分類でき、引用節以外の接続助詞はC類に分類できる。語形変化+接辞にはA類が多く、B類を形成するものもある。

ここで、最初に示した例(1) - (4)についても考えてみる。(2)の「おかげで」、(3)の「にもかかわらず」は例(6)、(7)からわかるように、文を承けて節を形成する接続助詞の一種と言え、C類に属する。一方、(1)の「ように」や(4)の「かとおもうと」は文を承けないので接続助詞ではない。かといって、動詞の活用形そのものでもなく、語形変化のシ形に付く接辞でもない。いったいどう位置づければよいのであろうか。いずれも異種主体を許容でき、B類であるといえるが、形態論上分類しようと思うと、上記表1のどこに当てはめたらよいか、困る。これらをより明確に記述する余地が残されている。

寺村(1982)ではB類に相当する複文2型は仮定のシタラ、スレバ、スルトに接続する「仮定節」のみに言及しているが、仮定を表さないものも複文2型として分類されるのかどうか、という問題もある。こうした問題は、これまでこの種の分類が主要な形式を中心に行われてきて、複合接続詞の分類についてはほとんど言及されてこなかったことによる。

3. 副詞節の2類型

上記の問題解決のため本稿では副詞節の形成の仕方を以下のように考える。

- (2) 副詞節は、節内の述語の形や共起する要素が制限される「語形変化+接辞」型と、節内の規則がほぼ文に相当し、制限がゆるい「文+接続助詞」型とに分けられる

このように考えることで、これまで未整理のまま放置されていた複合接続詞を網羅的に分類し、その体系を記述することが可能となる。冒頭の例(1)と(4)にテンスの対立が不可能であることも矛盾なく理解できる。すなわち、「咲くように」の「咲く」や「光ったかとおもうと」の「光った」はいずれも固定化された動詞の変化形であり、接辞の間にどんな要素も介入せず、また他の形式との互換性もないので、後接する「ように」や「かとおもうと」が文を承ける接続助詞と同じものだと考えたのでは、適当ではないのである。

以下、「語形変化+接辞」型を「語形変化型」、「文+接続助詞型」を「接続助詞型」と呼ぶ事にする。同様に語形変化型を形成する複合接続詞はその「接辞」として、接続助詞型を形成する複合接続詞は「接続助詞」として扱う。

南 (1974) および田窪 (1987) の功績のひとつは、日本語の階層性を示したところにあったが、主文述語の階層構造という観点からの分類の基準の立て方は多義性、類義性の高い複合接続詞の分類としては不安を感じる。「ながら」、「ため」のように1つの形式が複数にまたがって分類されることもある。多種多様な複合接続詞には本稿のような形態論的な特徴という観点からの分類のほうがより客観性をもって明瞭に分類でき、有効であると思われる。

4. 現代日本語の副詞節の体系

4. 1. 語形変化型

語形変化型は、城田 (1998) では、シ形+接辞のみが取り扱われ、寺村 (1982) はスル形+トを複文4型として取り扱った。しかし、スル形⁴や例(4)のようなシタ形に続くもののほか、シテ形、シナイ形、シヨウ形、スレバ形に接続するものもある。いずれも、それ以外の形は許さず、また動詞と接辞の間に割り込みを許さない、固定化した形式である。

(22) シ形を受ける助辞・複合接続詞

-0, -しだい, -ざまに, -ついでに, -かたがた, -がてら, -がけに
-しなに, -ながら, -つつ, V (シ形) V (シ形), -つV (シ形) -つ
-つつも, -ながらも

(23) シタ形を受ける助辞・複合接続詞⁵

-ら, -り, -って, -とたんに, -かとおもうと, -あとで, -うえで
-がさいご, -ところで, -ところ, -すえに, -きり, -まま, -あげく

(24) シテ形を受ける助辞・複合接続詞

-0, -から, -はじめて, -いらい, -からでないと, -からというもの
-も, たとえV (シテ形) -も, -まで

(25) シナイ形語幹 (ナイを省いた形) を受ける助辞・複合接続詞

-ず, -ないで, -んばかりに, -ないまでも, -んがために, -ことには

(26) シヨウ形を受ける助辞・複合接続詞

-かV (スル形) -まいか, -ものなら, -がV (スル形)-まいが

(27) スル形を受ける助辞・複合接続詞

a. スル形のみを受けるもの

V (スル形) V (スル形), -にさいして, -にあたって, -やいなや
-なり, -まえに, -にさきだって, -かたわら, -ことなく, -ともなく
-たびに, -につけて, -につれて, -にしたがって, -にともなって
-とともに, -べく, -にいたっては

b. スル形かシナイ形かを受けるもの

-うちに, -とかV (スル形/シナイ形) -とか, -やらV (スル
形/シナイ形) -やら, -にしてもV(スル形/シナイ形) -にしても
-なりV (スル形/シナイ形)-なり, -かわりに, -ために, -うえに
-ように, -と, -ものなら, ~もV (スル形/シナイ形)-なら~も

(28) スレバ形を受ける助辞・複合接続詞

-0, V (スレバ形) V (スル形) -ほど, -こそ, ~もV (スレバ形) ~も

4. 2. 接続助詞型

接続助詞型は、文単位で意味を変える。節内の規則は文とほぼ同じであろう。テンスの対立を許すという基準で接続助詞型と語形変化型とを区別できることは既に述べた。城田 (1998: 293-295) はこうした、文に後接し、文ごとその意味を変える「文尾助辞」には、受ける文に第Ⅰ類 (終止形型)、第Ⅱ類 (特殊連体形型)、第Ⅲ類 (連体形型)、第Ⅳ類 (体言語幹型) の4類が区別できるとした。これらの区別は、動詞文やイ形容詞文では顕在化しないが、ナ形容詞文や名詞文を受けるときに顕在化する。これに加え、接続助詞型の場合、さらに第Ⅴ類 (である形型) の区別まで必要となる。

(29) 終止形型: 完全な文を受けるもの

が, し, から, けれど, からこそ, としたら, とすれば, からといって
といっても, とおもいきや, とはいえ, としても, にしても, とは
とというものの, …

- a. きれいだから, ~ 病気だから, ~
b. きれいだったから, ~ 病気だったから, ~

(30) 特殊連体形型: 特殊な連体形を受けるもの

ので, のに, ...

- a. きれいなので, ~ 病気なので, ~
b. きれいだったので, ~ 病気だったので, ~

(31) 連体形型: 連体形を受けるもの

ために, おりに, さい, ところ, うちに, そばから, とき, ついでに
ほど, くらい, だけ, ほど~はない, くらい~はない, いっぽう
はんめん, ように, とおり, わりに, あまり, いじょうは, うえは
おかげで, こととて, せいで, だけあって, だけに, ところから
ところをみると, ばかりに, ものだから, もので, ばあいは, かぎり
かぎりでは, くせに, くせして, ものの, ところを, ものを
ことはV (終止形型) が, うえ, ばかりでなく, ばかりか, くらいで
ことに, ...

- a. きれいなために, ~ 病気のために, ~
b. きれいだったために, ~ 病気だったために, ~

(32) 体言語幹型: 体言の語幹のみを受けるもの

なら, かV (否定形) かのうちに, が早いか, とばかり, にしては
としても, にしても, にしろ, にせよ, のみならず, どころか, ...

- a. きれいなら, ~ 病気なら, ~
b. きれいだったなら, ~ 病気だったなら, ~

(33) である形型: 「である形」をうけるもの

かのように, からには, にもかかわらず, にとどまらず, ...

- a. きれいであるにもかかわらず, ~ 病気であるにもかかわらず, ~
b. きれいであったにもかかわらず, ~ 病気であったにもかかわらず, ~

表 2. 語形変化型の副詞節

意味	述語の形	接辞	例
時点・場面	スル形	に さいして	この調査を始めるに際して、関係者の了解をとらなければならない。
	スル形	に あたって	新居を購入するにあたって、わたしもいろいろな調査をしました。
時間的同时性	シ形	しだい	そちらに着き次第、先方に電話します。
	シ形	ざまに	振り向きざまに、斬りつけた。
	シタ形	とたん (に)	ずっと本を読んでいて急に立ち上がったとたん、めまいがしました。
	シタ形	(か)とおもうと (か)とおもったら	空で何かピカッと光ったかと思うと、ドーンと地面が揺れた。
	スル形	やいなや や	そのニュースが伝わるや否や、テレビ局に抗議が殺到した。
	スル形	なり	子どもは母親の顔を見るなり、ワッと泣き出しました。
時間的前後関係	シ形	0	家に帰り、風呂に入った。
	シタ形	あと (で)	食事をした後、ディスコへ行った。
	シタ形	うえ (で)	詳しいことはお目にかかった上で、説明いたします。
	シテ形	0	戸をきちんと閉めて、出てください。
	シテ形	から	結婚してから、もう3年になる。
	シテ形	はじめて	入院してはじめて、健康のありがたさがわかりました。
	シテ形	いらい	大学を卒業して以来、中山さんには一度も会っていません。
	シテ形	からで ないと からで なければ	野菜を生で食べるなら、よく洗ってからでないと、農薬が心配だ。
	シテ形	からと いうもの	たばこをやめてからというもの、食欲が出て体の調子がとてもいい。
	スル形	まえに	ごはんを食べる前に、手を洗う。
	スル形	に さきだって	首相が北朝鮮を訪問するに先立って、関係者の調整が行われた。
	スル形/シナイ形	うちに	東京にいるうちに、ぜひ一緒に食事をしようって自ってんだ。
	様態・程度	シ形	ついでに
シ形		かたがた	家へ帰宅しかたがた、昼食を食べてきた。
シ形		がてら	遊びがてら、田舎へ行ってきた。
シ形		がけに	夫が帰りがけに、鯛を買ってきてくれた。
シ形		しなに	帰りしなに、夕日を眺めた。
シ形		つつ	俳句を作りつつ、古都を訪れる。
シ形		ながら	歌をくちずさみながら、歩く
シ形-シ形		VV (シ形反復)	酒を飲み飲み、話をした。
シテ形		0	髪をふりみだして、探す。
スル形		かたわら	川田さんは銀行に勤めるかたわら、作曲家としても活躍している。
スル形		ことなく	敵に知られることなく、島に上陸するのは難しい。

様 態 ・ 程 度	様	子	シ形-シ形	つ Vつ	変な男の人がうちの前を行きつ戻りつ徘徊している。		
			シナイ形 語幹	ん ばかりに	彼女は泣かんばかりに「手紙をくださいね」と言って別れた。		
			スル形	ともなく ともなしに	見るともなく窓の外を見ると、流れ星が見えた。		
	例	示	シタリ形	0	いつも朝は新聞を読んだり、コーヒーを飲んだりして、過ごす。		
			スル形 / シナイ形	とか Vとか	親と話し合うとか、先輩に相談するとかして進路を決めてください。		
			スル形 / シナイ形	やら Vやら	びっくりするやら、悲しむやら、聴衆の反応は様々だった		
			スル形 / シナイ形	に しても Vに しても	泳ぐにしても、走るにしても、体を動かすときは単調運動が必要だ。		
	較	対	比	シナイ形	までも	休みごとには帰らないまでも、1週間に1回ぐらいは電話したら。	
				シヨウ形 - スル形	か Vまいか	朝出かけるときはいつも、かきを持って行こうか行くまいかと迷う。	
				スル形 / シナイ形	かわりに	雨だったので、テニスをするかわりに、うちでテレビを見ました。	
		関	連	応	スル形	たび (に)	あの人は、会うたびに、新しい話題を聞かせてくれる。
					スル形	に つけて	あの人の暗い顔を見るにつけて、わたしは子どもの頃を思い出す。
相		関	関	係	スル形	に つれて	時間がたつにつれて、印象が次第に薄れていった。
					スル形	に したがって	警察の調べが進むにしたがって、次々と新しい疑問点が出てきた。
					スル形	に ともなって	問題解決の能力は、経験を重ねるに伴って、身についてくる。
					スル形	と ともに	陽射しが強まり、気温が高くなるとともに次々と花が開き始める。
					スレバ形 - スル形	Vほど	就職試験のことは、考えれば考えるほど心配になってくる。
目 的 的	目 手 媒 体	的 段 体	シナイ形 語幹	んが ため (に)	研究を完成させんがため、彼は昼夜寝ずにがんばった。		
			スル形 / シナイ形	ため (に)	真実をより早く解明するために、我々は前進するしかない。		
			スル形 / シナイ形	うえで	今度の企画を成功させる上で、ぜひみんなの協力が必要なのだ。		
			スル形	べく	ひとこと鈴木さんに別れの言葉を言うべく、マンションを助れた。		
			スル形 / シナイ形	よう (に)	風邪が早く治るように、注射をしてもらいました。		
			理由	原因	理由	シ形	0
			シテ形	0	頭痛がして、休みました。		
			スレバ形	こそ	君の将来を考えればこそ、忠告するのだ。		
条 件	仮 定 条 件 確 定 条 件		シ形	0	ロシアが参加し、6カ国になる。		
			シ形	さえすれば	これは、薬を飲みさえすれば、なおるという病気ではない。		
			シタ形	が さいご	このキーをいったん押したら最後、データは全部消えてしまいます。		
			シタラ形	さいご			

条件	仮定条件 確定条件	シタラ形	0	家に帰ったら、手紙が来ていた。
		シテ形	0	歩いて、40分ぐらいかかる。
		シナイ形	ことには	死れるかどうかは、市場調査をしてみないことには、断定できない。
		シナイ形	かぎり	責任者が賛成しないかぎり、この企画書を通すわけにはいかない。
		シヨウ形	ものなら	この学校は厳しいから、断らずに欠席しようものなら、大変だ。
		スル形/シナイ形	と	ジョークが笑われないと、とても恥ずかしい。
		スル形/シナイ形	ものなら	できるものなら鳥になって国へ帰りた。
		スレバ形	0	この薬を飲めば、病気は治ります。
腹	逆接歩	シ形	つつ (も)	悪いと知りつつも、友達のリポートを写して、そのまま出してしまった。
		シ形	ながら (も)	彼は豊かな才能に恵まれながらも、病で32歳でなくなってしまった。
		シタツテ形	0	どんなに練習したって、優勝には手が届かないよ。
		シテ形	も	いくら言っても、聞かないんじゃ、しょうがない。
歩	逆接仮定条件	シヨウ形	がとも	誰が何と苗おうが、わたしは決心を曲げないつもりだ。
		シヨウ形・スル形	が Vまいがと Vまいと	雨が降ろうと降るまいと、この行事は毎年同じ日に行なわれます。
		シタ形	ところで	今から走って行ったところで、間に合うはずがない。
		シテ形	たとえ Vも	たとえ雪が降っても、仕事は休めません。
結果	経過	スル形	に いたって (は)	関係者は子どもが自殺するに至って、初めて事の重大さを知った。
		シタ形	ところ	久しぶりに先生のお宅をお訪ねしたところ、先生はお留守だった。
		シタ形	あげく (に)	大学を受験するかどうか、考えたあげく、受けないことに決めた。
		シタ形	すえ (に)	帰国するというのは、さんざん迷った末に出した結論です。
		シタ形	きり	子どもが朝、出かけたきり、夜の8時になっても帰って来ない。
付加	状態の放圍	シタ形	まま	暑かったので、窓を開けたまま、寝た。
		スレバ形 スル形/シナイ形	～も V ～も ～も Vなら ～も	あしたは数学の試験もあればレポートも提出しなければならぬ。
強調	強調	スル形	だに	あのひととの再会は、想像するだに胸がドキドキする。
		シテ形	まで	映画の仕事は彼が家出をしてまでやりたかったことなのだ。
並列	並列	シ形	0	夏休みに花子はよく遊び、太郎はよく休み、僕はよく学んだ。
		シテ形	0	今日は、花子は三越に行つて、太郎はジャスコに行きます。

表3. 接続助詞型の副詞節

意味		述語の形	接続助詞	例
場所	場所	連体形型	ところ	かつては何もなかったところに、今は小さな林が茂っている
	時点・場面	連体形型	おり(に)	このことは今度お目にかかった折に詳しくお話しいたします。
連体形型		さい(に)	これはアメリカを訪問した際、現地の子どもから受け取ったメッセージだ。	
連体形型		ところ	3ページまで終わり、4ページに入るところ、修了のベルが鳴ってしまった。	
連体形型		うちに	今は上手に話せなくても練習を重ねるうちに上手になります。	
時間	時間的同時性	体言語幹型～否定形	か Vかの うちに	子どもは「おやすみなさい」と言ったか言わないかのうちに、もう眠ってしまった。
		体言語幹型	が 早い	小田先生はチャイムが鳴るが早いか、教室に入ってくる。
		連体形型	そばから	小さい子どもは、お母さんが洗濯するそばから、服を汚してしまいます。
		連体形型	とき(に)	私たちは、私の就職が決まったときに、結婚しました。
線量・程度	付非付 帯帯	連体形型	ついでに	上野の美術館に行ったついでに、久しぶりに公園を散歩した。
	様子	連体形型	ほどくらい	きのうは山登りに行って、もう一歩も歩けないほど疲れました。
		である形型	かの ように	山田さんの部屋は何ヶ月もそうじしていないかのよう汚い。
		体言語幹型	とばかり(に)	彼はお前も腕めとばかり、その手紙を机の上に放り出した。
限界・範囲	連体形型	だけ	テーブルの上のものは食べたいだけ食べてもいいのです。	
比較	比較・最上級	連体形型	ほど ～はない くらい～はない	夕食後、好きな音楽を聴きながら、本を読むくらい楽しいことはない。
		体言語幹型	どころか	隣の部屋に住む人は出会っても話をするどころか、あいさつもしない。
	比	連体形型	いっぽう(で)	いい親は厳しく叱る一方で、ほめることも忘れない。
		連体形型	はんめん	科学の発達を生活を便利にする反面、環境を汚すことになるのではないか。
	基準	連体形型	ように	世の中が何でもあなたの思うように動くなどは考えないでください。
		連体形型	とおり(に)	わたしの言ったとおり(に)やってみてください。
評価の視点	連体形型	わりに(は)	わたしの母は、年をとっているわりには意欲的です。	
体言語幹型	に しては	この文は文学賞をとった彼が書いたにしては、活力がなく、おもしろさもない。		
理由	原因	連体形型	あまり	今のオリンピックは勝ちにこだわるあまり、大切なものをなくしている。
		連体形型	いじょう(は)	約束した以上、約束は守るべきだと思う。
		連体形型	うえは	社長が決断した上は、我々社員はやるしかない。
		連体形型	おかげで	彼がけさ電話をかけてきてくれたおかげで、遅刻しませんでした。
		終止形型	からこそ	先生に手術をしていただいたからこそ、再び歩けるようになったのです。
		終止形型	から	約束の時間に遅れてはいけないから、そろそろ出かけよう。
		である形型	からは からには	ひきうけたからは責任がある。

理由	原因	連体形型	こととて	世間知らずの若者がしたこととて、どうぞ許してやっ てください。	
		連体形型	せいで	林さんが急に休んだせいで、今日は3時間も残業しな ければならなかった。	
		連体形型	だけ あって	10年もフランスに住んでいただけあって、彼女は洋 服のセンスがよい。	
		連体形型	だけに	父は年をとっているだけに、病気をすると心配だ。	
		連体形型	ため(に)	当時は環境についての意識が低かったため、ゴミの 捨て方は減茶苦茶だった。	
		連体形型	ところから	灰皿に吸い殻が残っていたところから、犯人はまだ 近くにいたと思われる。	
		連体形型	ところをみると	部屋の電気がついているところをみると、森さんは まだ起きていたようだ。	
		特殊連体形型	ので	太郎は風邪気味だったので、学校を休んだ。	
		連体形型	ばかりに	注意を忘れてちよっと生水を飲んだばかりに、おな かを悪くしてしまった。	
		連体形型	ものだから もので	目覚まし時計が壊れていたものですから、遅れてしま いました。	
条件	仮定条件 確定条件限定	終止形型	と したら と すれば	もし、ここに100万円あったとしたら、何に使いま すか。	
		体言語幹型	なら	もし住民が一人でも反対するなら、埋め立てはする べきではない。	
	限 定	連体形型	ばあい(は)	カードをなくした場合は、すぐカード会社に連絡し てください。	
		終止形型	かぎり(は)	日本はこの憲法を守っているかぎり、平和が維持 されると思う。	
	終止形型	かぎりでは	この売り上げ状況のグラフを見るかぎりでは、わが 社の製品は順調だ。		
歩 驟	逆 驟	接 歩	終止形型	が	風は吹いたが、桶屋はもうからなかった。
			連体形型	くせに くせして	本当のことを何も知らないくせに、わかっているよ うなことをいうものではない。
			終止形型	け(れ)ど(も)	この論文は2度読んでみたけれども、理解できなかつ た。
			連体形型 終止形型	ものの と いうものの	頭ではわかっているものの、実際に使い方を言葉で 説明するのは難しい。
			終止形型	からと いうて	大学を出たからと いうて、必ずしも教養があるとは 言えない。
			終止形型	と いうても	彼はロシア語ができると いうても日常会話だけで、 腕んだり番いたりだだだ。
			終止形型	と おもいきや	父親が大酒飲みだから彼も飲むのだろうと思いきや、 一面も飲めないそうだ。
			連体形型	ところを	あの人は疲れているところを、わたしのためにいろ いろ調べてくれた。
			終止形型	とは いえ	新聞に書いてあるとはいえ、これがどこまで本当の ことかはわからない。
			体言語幹型	に しても に しろ	一日中忙しかったにしても、電話をかける時間ぐら いあったと思う。
			である形型	にも かわらず	耳が不自由というハンディがあるにもかかわらず、 彼は大学を卒業できた。
			特殊連体形型	のに	何度も説明したのに、分かってもらえなかった。
			連体形型	ものを	先輩があんなに親切に言ってくれたものを、彼はど うして断るのだろう。
			逆接仮定条件	終止形型	と しても と しても
体言語幹	に しろ に せよ	たとえ家を買おうにしろ、親にお金をだしてもらわ けにはいかない。			
部分否定	連体形型~終止形型	ことは Vが	中国語はわかることはわかるんだけど、話し方が速 いとよくわからない。		

付 加	付	加	連体形型	うえ (に)	ゆうべは道に迷ったうえ、雨にも降られて大変でした。
	非 限 定		連体形型	ばかりで なく	テレビの見過ぎは目を弱めるばかりでなく、自分で考える能力も失わせる。
			連体形型	ばかりか	いくら薬を飲んでも、かぜが治らないばかりか、もっと悪くなりました。
			体言語幹型	のみ ならず	山川さんは出張先でトラブルを起こしたのみならず、部長への報告も怠った。
			である形型	に とどまらず	学歴重視は子どもらしさを奪うにとどまらず、社会全体を歪めるに至っている。
強 調	強	調	連体形型	くらいで	ちょっと会ったくらいで、人のことがわかるはずはない。
	感 嘆 願	嘆	連体形型	ことに (は)	驚いたことに、保守政党と革新政党が共に手を組んで連立内閣を作った。
		望	終止形型	とは	いつもはおとなしい山下さんがそんなことまで言うとは意外でした。
並 列	並	列	終止形型	し	雨も降ったし、風も強かったし、それで海には行かなかったんだ。

4. 3. 副詞節の形成のタイプと意味の関係

以上のことをふまえ、現代日本語の複合接続詞の全体像を表2、表3⁶として示す。ここから副詞節の形成のタイプと意味の相関について検討してみる。

(34) a. 語形変化型でしか表されないもの

「時間的前後関係」、「例示」、「関連・対応」、「相関関係」、「目的」、「結果」

b. 語形変化型のほうが表現が豊富なもの

「付帯・非付帯」、「仮定条件・確定条件」

(35) c. 接続助詞型のほうが表現が豊富なもの

「原因・理由」、「逆接・譲歩」

d. 接続助詞型でしか表されないもの

「場所」、「限界・範囲」、「比較・最上級」、「基準」、「評価の視点」、「限定」、「部分否定」、「非限定」

意味上、(34)と(35)とは相反する関係にある。意味的に見て、aからb、bからc、cからdへ行くにしたがって、前件の後件に対する従属度が低くなり、前件と後件とはお互いとくに関連することなく、それぞれ独自に起こったものとして表され、独立性が高くなる。逆に、dからc、cからb、bからaに行くにしたがって、副詞節が表す出来事の独立性は低くなり、前件は後件の一部と

してお互いに密接に関連し合って、起こったものとして表され、従属度が高くなる。先行研究の記述で焦点となっていた「文らしさ」という観点から述べると、このような傾向として説明することができる。

4. 3. 1. 「包摂関係」

まず、(34)で挙げられているものはいずれも前件と後件とに密接な関係があるので、前件がなければ後件がない、あるいは、後件のあり様を前件で示す、といった類のものである。節は出来事の様態を表す副詞に近い性格を持つ。逆に言えば、述語の形を決めることで前件と後件の関係が固定化される。

- (36) たばこをやめてからというもの、食欲が出て体の調子がとてもいい。
- (37) 泳ぐにしても、走るにしても、体を動かすときは準備運動が大切だ。
- (38) あの人の暗い顔を見るにつけて、わたしはこどもの頃を思い出す。
- (39) 警察の調べが進むにしたがって、次々と新しい疑問点が出てきた。
- (40) 研究を完成させんがため、彼は昼夜寝ずにがんばった。
- (41) 大学を受験するかどうか、考えたあげく、受けないことに決めた。
- (42) 遊びがてら、田舎へ行ってきた。
- (43) この病気は、薬を飲みさえすれば、なおる。

たとえば、(36)の「時間的前後関係」、(38)の「関連、対応」、(39)の「相関関係」、(40)の「目的」、(41)の「結果」、(43)の「確定条件」の意を表す副詞節は、前件があつてはじめて後件が成立する類いのものである。また、(37)の「例示」、(42)「付帯」の意を表す副詞節は、後件のあり様を前件が示している。いずれの場合も前件と後件とは密接な関係にあり、前件は後件の1要素として、後件に包摂された従属的な関係にあると言える。

この例から接辞を取り除いた場合でも、前件は文として独立できず、一貫して不自然な文となる。ここからも語形変化型の従属度の高さが確認できる。

- (44) たばこをやめて、食欲が出て体の調子がとてもいい。
- (45) 泳ぐ、走る、体を動かすときは準備運動が大切だ。
- (46) あの人の暗い顔を見るる、わたしはこどもの頃を思い出す。
- (47) 警察の調べが進む、次々と新しい疑問点が出てきた。

- (48) 研究を完成させん、彼は昼夜寝ずにがんばった。
- (49) 大学を受験するかどうか、考えた、受けないことに決めた。
- (50) 遊び、田舎へ行ってきた。
- (51) この病気は、薬を飲み、なおる。

4. 3. 2. 「対等関係」

つぎに(52)になると、前件と後件とは異なる場所で異なる時間に起こる類のものであり、両者の関係は独立的であり、対等である。それぞれ独自に起こった前件と後件とが、接続助詞によって結び付けられ、関係性を付与される。文と文との接続に近い性格を持っており、より文らしい節といえる。

- (52) ちょうど出かけるところ、急に電話がかかってきた。
- (53) テーブル上のもものは食べたいだけ食べてもいいのです。
- (54) 夕食後、好きな音楽を聴きながら、本を読むくらい楽しいことはない。
- (55) わたしが言ったとおりに、やってみてください。
- (56) この文は文学賞をとった彼が書いたにしては、おもしろくない。
- (57) この売り上げ状況のグラフを見るかぎりでは、わが社の製品は順調だ。
- (58) 中国語はわかることはわかるんだけど話し方が速いとよくわからない。
- (59) 山川さんは出張先で問題を起こしたのみならず部長への報告も忘れた。
- (60) 10年もフランスに住んでいただけあって、彼女は洋服のセンスがいい。
- (61) 大学を出たからといって、必ずしも教養があるとは言えない。

ここで、(52)の「場所」、(53)の「限界・範囲」、(54)の「比較・最上級」、(55)の「基準」、(56)の「評価の視点」、(57)の「限定」、(59)の「非限定」の意を表す副詞節は、前件は後件の一部というわけではなく、後件の行われる範囲や基準を異なる視点から具体的ないしは抽象的に限定する類のものである。(58)の「部分否定」、(60)の「原因・理由」、(61)の「逆接・譲歩」の意を表す副詞節は、並列的な前件と後件との関係のあり方を示している。いずれの場合も前件と後件は独自に成立しており、両者に時間的、あるいは空間的な従属関係は見いだせない。前件と後件は意味上独立し、対等である。

これらの文から接続助詞を取り除くと、次のようになる。

- (62) ちょうど出かける。急に電話がかかってきた。
- (63) テーブル上のは食べたい。食べてもいいのです。
- (64) 夕食後、好きな音楽を聴きながら、本を読む。楽しいことはない。
- (65) わたしが言った。やってみてください。
- (66) この文は文学賞をとった彼が書いた。おもしろくない。
- (67) この売り上げ状況のグラフを見る。わが社の製品は順調だ。
- (68) 中国語はわかる。話し方が速いとよくわからない。
- (69) 山川さんは出張先で問題を起こした。部長への報告も怠った。
- (70) 10年もフランスに住んでいた。彼女は洋服のセンスがいい。
- (71) 大学を出た。必ずしも教養があるとは言えない。

ここから言えることは次の2点である。まず、前件も後件もそれぞれ文としては成立可能だということ。つぎに、両者の意味関係はバラバラになり、文のつながりとしては不自然となるということ。前者の現象からは接続助詞型の前件と後件との独立性の高さが示され、後者の現象からその前件と後件とは接続助詞によってのみ関係性を付与されているということが確認できる。

4. 3. 3. 副詞節の性格

以上のように意味的観点から見ると、語形変化型の副詞節は主文に「包摂」される関係にあり、接続助詞型の副詞節は主文と「対等」の関係にあるということが言える。このことは本稿の分類の上でも、南(1973)や寺村(1982)の分類における「文らしさ」の反映が依然有効であることを意味している。

別の例を挙げると、次の(72)と(73)はともに「ついでに」を付置し、付帯状況を表す副詞節を形成するが、語形変化型である前者は副詞節の出来事が主文の出来事に包摂される関係、接続助詞型である後者は副詞節の出来事が主文の出来事と並列される対等な関係にあるという観点から区別できる。

- (72) 家へ帰りついでに、昼飯を食べてきた。
- (73) a. 家へ帰るついでに、昼飯を食べてきた。
b. 家へ帰ったついでに、昼飯を食べてきた。

ここで(72)と(73)とは微妙にニュアンスが異なる。(72)では家への帰路、おなか

がすいたので、ふらりと昼飯を食べて帰ったという意味であるが、(73a)はふらりというよりも、家へ帰る機会を利用して、あらためて昼飯を食べたというニュアンスが強いように感じられる。また、(73b)ではシタ形の影響で「帰った」のは「食べてきた」よりも前の出来事の意になるので、離れた実家などに所用で帰省した際、昼飯を食べた、という解釈となる。

つまり、(72)は「家へ帰る」ことが「昼飯を食べる」ことの構成要素の1つであるため、あくまで従属的な解釈しかできないのに対し、(73)では前件と後件とが対等な並列関係にあるため、前件の動詞の形によって意味の交替、前件と後件の時間軸上の入れ替えが可能となっている。

このように副詞節の形成の仕方という観点から設定された語形変化型と接続助詞型という分類は、意味的観点から見ても意義のある分類であり、それぞれ副詞節と主文とが「包摂関係」、「対等関係」という異なった性格をもつということがわかった。ここに表現形式と意味との深い相関がとらえられる。

5. 結

本稿では、現代日本語の副詞節の体系を形態論的特徴から大きく2つに分けることを提案し、複合接続詞の全体像を分析した。副詞節は語形変化+接辞によるものと、文+接続助詞によるものの2つに分類できると考えられる。

接続詞の体系をこのようにとらえることで、第1節で示した例のうち、あるものは述語が自由に交代可能であり、あるものは不可能である、という現象を矛盾なくとらえることが可能となる。すなわち、(1)と(4)が語形変化+接辞という固定化された表現であるので、述語の形の交代ができず、一方の(2)と(3)は文に接続する接続助詞であるので、述語が自由に交代可能なのである。

また、語形変化型と接続助詞型とは、形成される節の意味にある一定の傾向が見られ、副詞節の意味のあり様に影響を与えているということも、体系を明示することで指摘できた。前件と後件との独立性の度合いということでは、接続助詞型のほうが高く、より文らしさを備えているということが明確になり、先行研究の分類の有効性も確認できた。

本稿では、複合接続詞を2つの類型に区別することで、その体系と意味の大

枠をそれなりに解明できた。さらに、構造的な分類基準も考慮に入れながら、個々の複合接続詞の文法現象を詳しく検討し、より詳細な一覧表を作成することは、現代日本語研究において大きな意義のあることと思われる。

註

- (1) 名詞節は補足節 complements, 形容詞節は連体節あるいは関係節 relative clausesともいう。(Shopen. (ed.) (1985))
- (2) 山岡 (1995: 319-321) でも同様の指摘があり、接続助詞の中でも「ノデ、ノニはダロウを承けないことを但し書きとして添える必要がある」と述べている。
- (3) 城田 (1998) はこれら接続助詞以外の「文尾助辞」として、～そうだ、～のだ、～ようだ、～らしい、～にちがいない、～みたいだ、～かもしれない、～だろう、～です等、モダリティを中心とした表現を挙げている。
- (4) スル形を認めるものには、その否定形であるシナイ形も同時に認めるものもある。
- (5) 本稿はシタラ形、シタリ形、シタッテ形はそれ自体が活用形であるとする城田 (1998)の主張を支持するが、分類の簡素化のためにここだけシタ形+接辞として扱った。
- (6) 表中の意味の分類および例の作成にあたっては、グループ・ジャマシイ (1998)、庵・高梨・中西・山田 (2001)、益岡・田窪 (1992)、森田・松木 (1989)、友松・宮本・和栗 (1996) 等を参考にした。

参考文献

- グループ・ジャマシイ (編) (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』秀英出版。

- 前田直子 (2002) 「複文の類型と日本語教育」『シリーズ言語科学5 日本語学と
言語教育』東京大学出版会 pp. 249-272
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 (改訂版)』くろしお出版.
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型——用例中心・複合辞の意味と
用法——』アルク.
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房.
- Shopen, Timothy. (ed.) (1985) *Language typology and syntactic description*.
Volume II. Complex constructions. Cambridge: Cambridge University
Press.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第6巻第5号 pp.37-48
- 寺村秀夫 (1982) 「日本語における単文, 複文認定の問題」『講座日本語学 第
11巻 外国語との対照研究 I』明治書院 pp. 202-220
- Thompson, Sandra A. and Longacre, Robert E. (1985) "Adverbial clauses."
*Language typology and syntactic description. Volume II. Complex
constructions*. (ed.) Shopen, Timothy. Cambridge: Cambridge
University Press. pp. 171-234
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (1996) 『どんな時どう使う日本語表現文型500』
アルク.
- 山岡政紀 (1995) 「従属節のモダリティ」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』く
ろしお出版. pp. 309-326

The Classification of Compound Conjunctions and the Properties of Adverbial Clauses

SOEJIMA Kensaku

Abstract

This paper examines the compound conjunction that forms the system of adverbial clauses in present-day Japanese.

I will demonstrate the system of adverbial clauses as follows. The adverbial clauses with the compound conjunction are classified into the inflectional type that consists of "inflection of the word + affix" and the conjunctive particle type that consists of "sentence + conjunctive particle." Moreover, I will also argue from the above view of adverbial clauses that the event in the adverbial clause of the inflectional type has a subsumed relation under a main clause event, and it of the conjunctive particle type has a relation of equality with a main clause event.